杉浦康平のアジアンデザイン研究
（ポスターと冊子を中心に）

KOHEI SUGIURA'S STUDY OF ASIAN DESIGNS
(Centering Around Posters and Booklets)

赤崎　正一　　芸術工学部ビジュアルデザイン学科　教授
杉浦　康平　　名誉教授
黄　國賓　　芸術工学部ビジュアルデザイン学科　教授
入江　経一　　芸術工学部映像表現学科　教授
榮元　正博　　芸術工学部ビジュアルデザイン学科　助教
萩原　小麻紀　芸術工学部ビジュアルデザイン学科　助教

Shoichi AKAZAKI　Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Kohei SUGIURA　Professor Emeritus
Kuo-pin HUANG　Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Keiichi IRIE　Department of Image Arts, School of Arts and Design, Professor
Masahiro EIGEN　Department of Visual Design, School of Arts and Design, Assistant professor
Komaki HAGIWARA　Department of Visual Design, School of Arts and Design, Assistant professor

要旨

本研究は2012年度共同研究から継続している、杉浦康平名誉教授のデザイン活動の包括的研究の一環である。これまでの活動として「ポスターアーカイブ」構築、ポスター展2回、単行本出版などがある。それらの成果をふまえて2017年度は「アジアンデザイン」の側面にフォーカスして、5回の連続インタビューを企図した。

杉浦名誉教授は、今年3月まで本学アジアンデザイン研究所において、所長として研究活動を主導してきた。その60年以上におよぶデザイン活動の中で、多くの重要な業績を残してきたが、「アジアンデザイン」概念の確立は、本学との関係においても特に重要なものとして位置づけられる。ポスター・冊子類のデザインからはじまって、その活動は、さまざまなアジア文化紹介の構想・企画までを包含するものに拡張し、デザインの領域を超える幅広い業績を残した。一方、そうしたデザイン活動を通じて、独自のアジア図像研究の領域を切り拓き、図像的想像力に充ちた大胆な仮説の提唱により、独自の図像論を確立し、数多くの著書を発表している。モダンデザインの牙城であるドイツのウルム造形大学での教鞭体験から、アジアンデザインにいたる道程は限りない大遠征のようにすら見える。われわれ共同研究組織は、その間に何があったのか、本人の率直な言葉として記録することを目指した。

Summary

This research program comprises an important part of the comprehensive study of Professor Emeritus Kohei Sugiura's design activities originated from the 2012 joint research project. The research activities undertaken so far include the establishment of the Poster Archive, two exhibitions of posters designed by Sugiura, and the publication of a book on his design. Based on these results, the 2017 program featured a series of five interviews with him focusing on "Asian design."

Professor Emeritus Kohei Sugiura led the activities of the Research Institute of Asian Design of our university as its director until March 2018. Sugiura has made many considerable achievements throughout his career that spans over sixty years. Among them, the development of the concept of "Asian design" is considered particularly important for our university. A wide range of activities based on this concept include the design of various posters and booklets, and a number of projects to present different Asian cultures. The diverse achievements of these activities have cut across the boundaries between design and other disciplines. At the same time, Sugiura has opened up his original research filed of Asian iconography, proposed an imaginative hypothesis, developed a unique iconographic theory, and produced a number of books. Considering his teaching experience at the Ulm School of Design in Germany, the stronghold of modern design in the sixties, it seems that he has made a great journey to come down to the idea of Asian design. This research program was designed to record what happened during this journey through a series of candid interviews with him.

【研究活動の背景】

2012年度から学内研究助成を受けて、本学名誉教授グラフィックデザイナー杉浦康平のデザイン活動について、共同研究を継続している。成果の中核に「杉浦康平ポスターアーカイブ」がある。このプロジェクトは現代を代表するデザイナーである杉浦康平のポスター作品の網羅的収集と、そこに現れるデザイン思想の解析、その影響の広がりを確認することにある。以下これまでの成果を列記する。

1）「杉浦康平ポスターアーカイブ」の詳細リスト化。
2013年度に第1次リスト完成、現在増補整理中。→図01

2）「杉浦康平インフォグラフィックス・ポスター展」。
2015年度。1970年代前半を中心に両面印刷されたインフォグラフィックスデザイン表現に充ちた特異な一群のポスターをアーカイブ中から選抜して展示。会期：2016年2月、会場：CURIO-CITY。→図02

3）「杉浦康平アジアンデザイン・ポスター展」。
2016年度。1979年から1992年までの国際交流基金との連携によるアジア文化紹介イベントのポスターを中心に、アジア的モチーフによりデザインされたポスターをアーカイブ中から選抜して展示。会期:2016年4月、会場:本学ギャラリー・セレンディップ。→図03

4）単行本『表裏異體——杉浦康平の両面印刷ポスターとインフォグラフィックス』の出版
2017年度。2016年2月開催の「杉浦康平インフォグラフィックス・ポスター展」の成果を集約して単行本化。発行:2017年6月、新宿書房。→図04

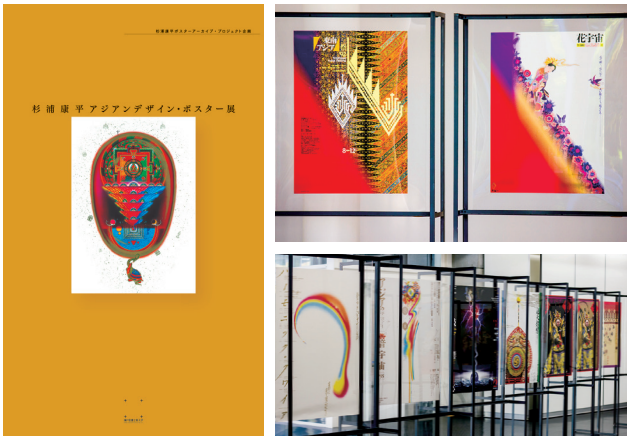
【当該年度研究活動の概要】

杉浦康平名誉教授へ5回にわたって連続インタビューを実施した。2016年4月開催の「アジアンデザイン・ポスター展」における展示ポスターを主な素材として、杉浦名誉教授の全デザイン活動の中におけるアジアンデザインの展開とその意義について聞き取り収録した。実施場所はすべて杉浦事務所（東京）。以下、各回インタビューのデータ記録となる。

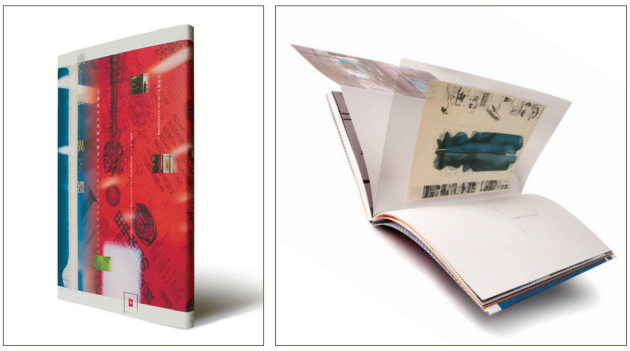
＊プレ・インタビュー、2017年8月18日実施。
　　インタビューの実施運営について。担当：赤崎。
＊第1回インタビュー、2017年9月15日実施。

01）「杉浦康平ポスターアーカイブ」リストの一部、2013年

02）「杉浦康平インフォグラフィックス・ポスター展」、2016年
左——告知ポスター、右2点——会場風景



03）「杉浦康平アジアンデザイン・ポスター展」、2016年
左——会場配布解説図録[*1]、右2点——会場風景



04）『表裏異體——杉浦康平の両面印刷ポスターとインフォグラフィックス[*2]』、2016年、新宿書房

アジア的デザインへ／「京劇」公演。担当：赤崎＋黄。

＊第2回インタビュー、2017年10月10日実施。

「マンダラ」展／交流基金との連携。担当：赤崎＋黄。

＊第3回インタビュー、2017年12月12日実施。

「アジアの仮面」展／「バリ舞踊」公演。担当：赤崎＋黄。

＊第4回インタビュー、2018年2月2日実施。

「アジアの宇宙観」展／「花宇宙」展。担当：赤崎＋黄。

＊第5回インタビュー、2018年3月13日実施。

越境するデザイン。担当：赤崎＋入江＋黄。

【研究活動の意義】

これまで杉浦康平名誉教授のデザイン活動の網羅的成果としては2冊の作品集が出版されている。2004年刊の『疾風迅雷』（図05）と2011年刊『脈動する本』（図06）の2冊である。前者は雑誌デザインの、後者は書籍デザインの集成となっている。ともに同名の展覧会の図録として刊行された。しかしこの2冊から漏れる作品群として、アジア文化紹介のさまざまな展示・公演のポスター・図録・プログラム類がある。未だ総合的な紹介がなされていないこれらの作品群こそ、杉浦デザインにおけるアジアンデザイン展開の動機ともなり、のちのアジア図像研究の基盤となったものである。本研究の重要な意義がここにあり、将来の第3の網羅的作品集出版への準備作業としても位置付けられる。その多くは国際交流基金との連携によるものである。80年代～90年代の海外文化交流における漸進的なアジア重点化の潮流の先端に位置付けられる。→図07

【研究活動の目標】

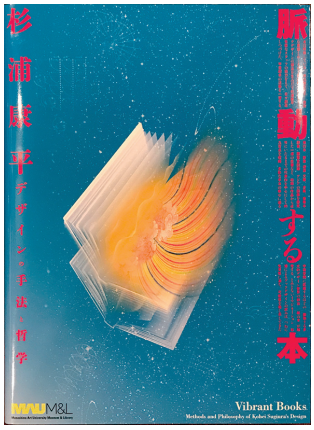
以下に列記する3つの問題構成を前提にインタビューをすすめた。単に個人のデザイン活動に収まらない杉浦康平の思想とその背景、後進の東アジアのデザイナーへのメッセージをもふくめて、聞き取ることを目標とした。

問題構成1　杉浦デザインと近代日本／アジアンデザイン

60年世界デザイン会議を画期とした、「新しく若い日本のデザイン＝戦後デザイン」という枠組みを問い直す。

戦後日本、とりわけて60年代以降の高度経済成長期において、かつてのアジア侵略は意図された忘却によって不可視化され「世界経済の中の日本」が現出した。グラフィックデザイン界の現象として見れば圧倒的な商業主義デザイ

05）『疾風迅雷[*3]』、2004年



06）『脈動する本[*4]』、2011年

07）国際交流基金との連携によるポスター類各種

ン（広告デザイン）の氾濫がポスターを中心に前景化した。80年代バブル経済期にかけて、この傾向は極限まで亢進するが、この同時代に「アジアの中の日本」という視点を模索した杉浦デザインの孤軍奮闘ぶりは際立つ。

グラフィックデザイン界における没批評的傾向は近代デザイン（＝西欧デザイン）の普遍性への信憑にある。そこには、空間的あるいは造形的・工芸的デザイン領域と決定的に問題を異にする、この領域特有の文字依存（日本語表記依存）問題に対する無自覚がある。「タイポグラフィ」もまた誤読されて受容されてしまっている。日本的伝統の召喚ではなく、文字と言語の問題から東アジアの伝統に直結するという当然の視点の獲得である。「アジアンデザイン」の問題は、「デザイン」の個別領域性の問題に回収されるものではない。

一方、杉浦名誉教授の個人史における重要な体験がそのデザイン活動へ及ぼした影響についても確認する。特に敗戦体験～戦後体験、2度のウルム滞在を中心とした「ヨーロッパ体験」、ユネスコからの委嘱派遣にはじまる、さまざまな「アジア体験」の、そのそれぞれが複合して「アジアンデザイン」の形成にどのように波及したかを検証する。逆境とも呼べる時代状況の中での杉浦デザインの「アジア的デザイン化」の模索の実態を探る。

問題構成2　「デザインワーク」を超えたデザイン活動

「花宇宙」展などを典型とする、発想から企画、調査と取材、展示空間構成、図録編集＋デザイン、広報宣伝＋デザイン、そのすべての綜合を同時進行で制作とするときに「デザイン」の意味とその位置付けについて確認する。また構想過程と、結果としての事実の間で起きるデザインの「調整」の実態も個別の企画の実務状況として確認する。

参照する同様の企画としては株式会社写研の「文字の生態圏」カレンダーなどがある。より複合化したデザイン活動、さらには図像研究にいたる「仕事」の重心の推移は「アジアンデザイン」の問題の中で展開してきた。それらの相互波及性ついて検証する。

問題構成3　文字・図像のコレクション・渉猟と「デザイン」

杉浦デザインにおける旺盛な「図」への志向を検証する。60年代からすでにはじまる多彩な文字・図像の渉猟～コレクションは、長い道程を経てマンダラ図像解析にいたる成果を生む。「図」への志向が「アジアンデザイン」の活動の中でデザインと図像研究を分かち難く結びつける結果、近年における杉浦名誉教授の研究～執筆～デザインの連続として展開する「本」という、単にブックデザインの問題を超えて出現する書籍制作の語法は、日本国内よりも中国をはじめとする東アジアの各地域での共鳴（＝響鳴）を惹き起こしている。

08）『ヴィジュアル・コミュニケーション*5』、1978年
本文ページより

初期の事例としての『ヴィジュアル・コミュニケーション』（図08）にもすでに典型的に現れている図像蒐集へのただならない情熱は、ビジュアルデザインが本来持つ情報伝達デザインの機能そのものであり、外貌としての「デザインスタイル」がどれほど変移しても、実はその中核に揺るぎのない「確信」があることを証明する。

＊

以上のような問題構成による5回のインタビューは話題が多岐にわたり、またこれまで紹介されることのなかった意外なエピソードに充ちたものにもなった。近い将来での一般書籍化を目指して、現在インタビュー記録の整理と、多様なデザインアイテムの資料収集の過程である。

＊1）『杉浦康平アジアンデザイン・ポスター展』、神戸芸術工科大学、2016
＊2）杉浦康平・神戸芸術工科大学共同研究組織著、赤崎正一編、『表裏異體――杉浦康平の両面印刷ポスターとインフォグラフィックス』、新宿書房、2017
＊3）杉浦康平［著］、臼田捷治監修、『疾風迅雷』、DNPグラフィックデザイン・アーカイブ、2004
＊4）杉浦康平監修・AD、『脈動する本』、武蔵野美術大学美術館・図書館、2011
＊5）杉浦康平、松岡正剛編著、『ヴィジュアルコミュニケーション』、講談社、1976